

アレクサンドル・ブロークの伝記研究における問題点 — 『自伝』 を中心に —

奈倉 有里

はじめに

アレクサンドル・ブロークの伝記についての研究は従来、本人による自伝的記述のほか、母方の叔母マリヤによる二つの伝記、すなわち『アレクサンドル・ブローク——伝記的随筆』¹ および『アレクサンドル・ブロークとその母』² を基礎資料と位置づけ、書簡や周囲の人々の感想、各機関に残された記録などを補足的資料として進められてきた。

だが出自に関しては、ブローク本人の自伝的記述にみられる事実関係の不確かな記述が、研究において十分な検証のないままそのまま使われる傾向もあり、また他方では、異論の余地のない「ブロークという姓はドイツ系 (Block) であり、父方の先祖はドイツ人である」という学説に、正面から異議を唱える声も最近まで存在していた。

しかしここ数年で、アーカイヴズの資料や新発見の資料等が複数公開されて活字になり、出自や幼年時代についてあらためて検証し、新たな考察を行う試みが進んでいる。

ただし、そうした趨勢にもかかわらず今なお十分に検討されていない点も残されている。たとえば伝記研究において最もよく言及される『自伝』ですら、取りあげられるのはもっぱら 1915 年に改訂された版³ であり、その元となった 1911 年の版⁴ との差異や、どのような経緯でそれらを書いたのかといったことには、これまであまり踏み込まれずにきた。

本論文ではこれらの背景をふまえ、近年新たに公開された資料を含む先行研究を可能なかぎり調査し、『自伝』の成立過程を考慮に入れたうえで、第 1 章で父方の出自に関する「ドイツ系」論争について、第 2 章で母方のベケートフ家におけるフランス文学の影響関係について検証を行い、第 3 章でそのふたつの論点にまたがる問題を考察する。

¹ Бекетова М.А. Александр Блок: Биографический очерк. Петербург. 1922.

² Бекетова М.А. Александр Блок и его мать. Л.-М., 1925.

³ Блок. Автобиография // Собрание сочинений в 8 томах. Т. 7. М., 1963. С. 7-16. 以下、本論で単に『自伝』とするのは当作品。またこの 8 巻全集は以降 Соб. соч. と略記し、巻号とページ数のみを記す。

⁴ Блок А.А. Александр Александрович Блок // Фидлер Ф.Ф. (ред.) Первые литературные шаги: Автобиографии современных русских писателей. М., 1911. С. 83-87.

第1章 父方の出自に関する「ドイツ系」論争

1-1. これまでの研究と論争

父方の家系について、ブローク自身は『自伝』のなかで、「父方の祖先はアレクセイ・ミハイロヴィチ帝に仕えた医師だった」⁵としているが、この伝説めいた記述については、ブロークの死後すぐの1922年に刊行された、B.H. クニャジニンのブローク伝において、次のような指摘がなされている。

さて、まず家柄や祖先について書いておこう。

アレクサンドル・アレクサンドロヴィチ [ブローク] は、それについては探求心を持っていなかった。彼は本気で伝説を信じていた。伝説とは (C. ゴロデツキーはこれを事実として活字にしてしまったが)、⁶ 彼の祖先の一人がアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の医師だというものだ。確かにブロークの曾祖父のさらに父、ヨハン・フォン・ブロックは、ドイツのメクレンブルク、シュヴェリーン出身で、じっさい医者だったが、ロシアで働き始めたのは1755年のことで、それも軍医としてのことだ。⁷

アレクセイ帝の在位は1645年から1676年であるから、ブロークの認識はまる一世紀もずれていることになる。一方このクニャジニンの記述は、後述するようにヨハン＝フリードリヒ・ブロックの「フォン」の称号に若干の説明が必要ではあるものの、そのほかの部分については現在では裏づけもとられており、ブロークの父方の祖先に関する情報として基礎となるべきものであった。

しかし、クニャジニンによる伝記以上に、今日に至るまでもっとも頻繁に引用されてきたのは、クニャジニンとほぼ同時期に書かれたマリヤによる伝記であった。マリヤの伝記にはブローク本人ほどの大きな認識のずれはみられないものの、原則として母方のベケートフ家に伝えられていた情報をもとにしており、確かな情報源とみなすには問題があった。

そのため父方の祖先については、それまでの伝記研究に対する疑問の声が、近年に至るまで幾度となくあがっていた。しかしその疑問の声は、情報の正確な検証ではなく、曲解や憶断につながることでさえしばしばであった。

たとえば、1982年にはГ.3. ブリュミンが、ブロークの『自伝』における「ブローク家はメクレンブルクに住んでいた」という記述をとりあげ、中世にはメクレンブルクにポラー

⁵ Блок. Соб. соч. Т. 7. С. 11.

⁶ 原注: Новый Энциклопедический словарь Брокгауза. Блок.

⁷ Княжнин В.Н. Александр Александрович Блок. Петербург. 1922. С. 7.

ブ系のスラヴ人が住んでいたことに言及し、その後も近代にいたるまでメクレンブルクがロシアと友好な関係を保っていたことを論拠に、メクレンブルクに住んでいたブローク家が、スラヴ系の家系であった可能性があるという推測をした。⁸

また、2017年現在はゴリキー世界文学研究所（ИМЛИ РАН）文学理論科の主導研究員を務め、刊行中のブローク20巻全集の編纂者にもなっているC.A. ネポリシンが、1991年に、ソヴィエト時代のブローク全集のテキストと手稿との間にいくつもの差異があるかということ告発的に書いた論考を発表したが、その冒頭でやや唐突に、「あるドイツ人」による「ドイツにブロークという姓はない」という発言を引用した。⁹

だがこの引用には根拠づけがされておらず、このドイツ人が「ブローク」というロシア語ナイズされた発音に該当するドイツ人名を思い当たらなかったのか、それともたまたまその姓を知らなかったのか、この限りでは判断のしようがない。

では、これまでの研究でブロークのドイツ系の祖先にあたりとされてきた姓Blockには、どのような意味と歴史があるのだろうか。人名事典を引くと、Block: 中高ドイツ語のbloc(h)、中低ドイツ語のblockに由来。意味は「木材」。この中高ドイツ語・中低ドイツ語の単語の意味はとても多様である。①身体的あるいは精神的に粗野な人、②囚人の足枷に用いる木材あるいは丸太。したがってBlockという名前は足枷をはめられた人、あるいは廷吏を意味したかもしれない、③堀で囲まれた農地の呼称、④罨の一種。となっており、いずれかを綽名としていたものが姓として用いられるようになったと推測されている。¹⁰

ネポリシンが上掲の論考のなかで、これらの前提をふまえないまま「あるドイツ人」の言葉を、さもその真実に目を見開かれたかのような書き方で引用したことは、当然批判的となった。しかしネポリシンは2011年にそれらの批判を受けた反論を発表し、20年前の論考で書いた話を再び引き合いに出し、そのときそのドイツ人がいかに「迷いなくはっきりと」、「ブロークという姓はドイツにはない」と言ったかをあらためて語ったうえで、あの言葉から自分が感じとったのは一種の仄めかしである、と論旨を濁している。¹¹

この問題を解決に向けるため、近年B.П. エニシェルロフは、ドイツ、メクレンブルク州都シュヴェリーンのアーカイヴズをあらためて調査し、ブローク家の祖先とみられる家

⁸ Блюмин Г.З. Из книги жизни: Очерк об Александре Блоке. Л., 1982. С. 7.

⁹ Небольсин С.А. Искаженный и запрещенный Александр Блок // Наш современник. М., 1991. № 8. С. 176-184.

¹⁰ Kohlheim Rosa und Kohlheim Volker. *Duden, Familiennamen: Herkunft und Bedeutung* (Mannheim: Dudenverlag, 2000), p. 136. この項目の翻訳にあたっては片山耕二郎氏のご教示を得た、心より感謝申しあげる。なお、以下のドイツの統計によると、2007年の時点で登録されているBlockという姓は5916件、地域はベルリンに325件のほか、ドイツ北部を中心に東西に幅広く分布する。姓の件数ランキングでは439位であり、特別多いわけではないが、とりたてて珍しいとはいえない程度のものである。Christoph Stöpel, Geogen4.0. [http://geogen.stoepel.net] (2017年2月14日閲覧)。

¹¹ Небольсин С.А. Ксенофобия не имеет национальности // Литературная Россия. № 44-45. М., 2011. С. 1, 6-7.

系の記録を遡って、ブロークの父方の祖父・曾祖父、また父にとっての母方の祖父などについて収集可能なかぎりの資料を整理し、父方の祖先に関するこれまでの研究を検証した論文¹²を発表した。それによって確実となったのは、現在確認できる最古のブロック家の人物は、1684年にマリア＝エリザベトと結婚したクリスチャン・ブロックであり、その孫でブロークの曾祖父の父（高祖父）にあたるヨハン＝フリードリヒ・ブロックが医者としてブロック家で初めてロシアへと移住したということだ。これは18世紀中盤にメクレンブルクの軍隊がロシアの軍曹に率いられてロシアへ向かったことに関連すると推測されている。ヨハン＝フリードリヒはロシアに帰化し、イワン・レオンチエヴィチ・ブロークというロシア名を得るが、しかしエニシェルロフが強調するように、このあとも二世代まではブロック家はドイツ系の家系とのみ婚姻をしており、ロシア人の女性と結婚したのは、ブロークの祖父にあたるレフ・アレクサンドロヴィチ・ブロークが初めてであった。

エニシェルロフはこの論文のなかで、ドイツのアーカイヴズで調査した資料をシャフマトヴォのブローク博物館に寄贈したことを述べ、近い将来に活字になることを望む旨を示した。これを受けて2013年には、シャフマトヴォのブローク博物館創設者のC.C. レスネフスキーが、エニシェルロフの論証をふまえた著作を書いている。¹³

ところが同2013年に刊行された、E.B. サフロノワとE.C. クラフチェンコによる『アレクサンドル・リヴォーヴィチ・ブローク——ある学者の伝記』（2013年）は、エニシェルロフらの研究に再び留保をつけている。同書はワルシャワ大学の法学者であったブロークの父アレクサンドル・リヴォーヴィチ・ブロークについて、「詩人の父」という枠を超えて一人の学者の伝記を記す試みとし著された研究書であるが、出自の問題に関してはこれらの論争をふまえ、「ドイツ系かどうかを疑問視する研究者もいる」として、ドイツ系であることを、確定できない要素として扱っている。¹⁴

こういった論争に終止符を打つため、2016年刊行の研究資料集において、E.B. イワノワは、新たな資料¹⁵を公開した。マリヤによる伝記が不正確である可能性については、実はマリヤ自身がのちに自ら気づき、1930年にドイツのアーカイヴズに情報を請求していた。イワノワによって公開されたのはそのときのドイツからの回答であり、この資料自体がエニシェルロフの論を裏付けるものであることに加え、付随するイワノワによる論証は、ネボリシンが主張した「非ドイツ系説」を明確に退けるものとなった。

また興味深いことに、イワノワの公開した回答には、先に挙げたクニャジニンの伝記な

¹² *Енишерлов В.П.* Апология отца // Шахматовский вестник. № 12. М., 2011. С. 37-69.

¹³ *Лесневский С.С.* Русская даль. Шахматово, Пролог. М., 2013.

¹⁴ *Сафронова Е.В., Кравченко Е.С.* Александр Львович Блок: Биография ученого. М., 2013. С. 9.

¹⁵ *Иванова Е.В.* О немецких предках Блока: Документальные материалы // Александр Блок: Исследования и материалы. Т. 5. СПб., 2016. С. 250-257.

どでこれまで「ヨハン・フォン・ブロック」とされていたヨハン＝フリードリヒの階級についても触れられている。それによると、ドイツ在住時の記録では一般階級に属しており、1792年の時点では本人も名前に「フォン」をつけておらず、ロシアでのちに「フォン」を名乗るようになったのであれば、それはロシアでの昇進にともなうことであろうということである。¹⁶

1-2. 「非ドイツ系説」発生の背景

ブロークは知人宛の書簡のなかで、自分の計画的な性質（систематичность）は、おそらくドイツ人の血を引いているためだろうと書いている。¹⁷ しかしこの書簡は1960年代の全集をはじめとしたソヴィエト時代の刊行物には収められず、1990年代になってようやく公開されたという経緯をもつ。このことは、上記の論争と無関係であろうか。

学術的とはいいがたいものも多い「非ドイツ系説」が幾度も発表され、それに対しエニシエルロフらが綿密な調査のうえ反論を試みなければならなかったことは、「ドイツ系説」に対する反発が存在しうる背景があったことを示唆する。これは、たとえ「ドイツ系」の出自が明らかであるという前提に立ったとしても、ブロークがそれをどう捉えていたと判断するかという問題が、長らく研究上の争点となってきたこととも連動している。

ブロークが自身の出自を意識していたことは、上に引用した書簡で「ドイツ人の血」と書いていたことから明らかだが、他にも『自伝』において、「父親と会う機会は少なかったが、僕は父を血で覚えている」¹⁸ と書いている。ただし、この一節はソヴィエト時代の伝記研究においても、会う機会の少なかった父親とのつながりをブローク自身が意識し続けていたという解釈のもとに度々引用されてきた。

どちらのケースでも、自分の出自について「血」という言葉を用いているが、公開されていたほうの文章ではその「血」を「父親の」としており、公開の遅れた書簡では「ドイツ人の」としている——まさにこれを併せ考えることへの抵抗感こそが、書簡の公開を遅らせた一因となっていたとも推測し得よう。

とはいえこの要因については、現段階で確実に把握することはできないが、そのように推測しうるだけの「抵抗感」や「反発」があったこと自体は、確認することができる。この検証のためには、ブロークのドイツ系の出自が、これまでの評伝のなかでどう扱われてきたのかを考えなければならない。まずトゥルコフによるブローク伝を見てみよう。

¹⁶ Иванова. О немецких предках Блока. С. 255-256.

¹⁷ Иванова Е.В. (сост.) Неизвестные письма и рецензии Блока // Литературное наследство. Т. 92. Александр Блок. Новые материалы и исследования. Кн. 5. М., 1993. С. 202.

¹⁸ Блок. Соб. соч. Т. 7. С. 12.

トゥルコフは1969年のブローク伝において、第一次世界大戦前後のブロークについて述べるなかで、「ブロークは狂信的愛国主義に陥ることはなく、かねてから抱いていたドイツ文化への愛着に、頑なに固執していた（とはいえ、ドイツの俗物根性には極度の嫌悪感を抱いていた）」¹⁹ とすると同時に、ブローク自身と親交のあった詩人 B.A. ピヤストが、「ブロークがロシアの同盟国を好んでいなかった」ことを理由に「ドイツ人の血が騒ぎだしたのだ」と言ったとしてピヤストを批判している。²⁰

しかし、ピヤストは確かにブロークがドイツ人の血を受け継いでいることや、同盟国に特に協力する必要を感じていなかったと記してはいるが、それはあくまでもブロークが「戦争を終わらせなければならないと思っていた」ことを述べるためであって、ブロークを批判する目的で「血」の問題に言及したわけではない。²¹ むしろ、ピヤストが「ドイツ人の血」に言及しただけでそれを批判するのは、トゥルコフのほうに、「ドイツ」に対する抵抗感が強くあったことを示すものだろう。

また、ブロークが「俗物根性に対する嫌悪感」を示していたのはドイツに限ったことではなく、フランスでも類似の感想を書き記しているうえに、²² なによりそういった感覚を頻繁に表していたのは、他ならぬロシアにおいてである。²³ したがってこのような場合、無批判に「ドイツの俗物根性」という表現を補うことには、伝記記述者による恣意的な文意の誘導ははらまれているといわざるを得ない。

ただし、そのような誘導を許してしまうような要因が、ブロークの作品受容においてみられることも事実である。とりわけ創作活動の中期以降において、詩『ルーシ』（1906年）および『ロシア』（1908年）をはじめ、ブロークは詩においても散文においても「ロシア」をテーマとして扱っているが、これらは、ロシアにおける学校教育のなかで、「ブロークにとっての祖国」として切りとられ、大きく扱われてきた。現代の文学教科書においても、このテーマに独立した節が設けられ、章末には「ブロークにとっての祖国のテーマはいかに発展していくのか答えなさい」という問いが課せられている。²⁴

このテーマが前面に押し出されることにより定着した「愛国的な詩人」という一般的なイメージが、とりわけ対独戦争を「大祖国戦争」と称し、その勝利を大々的に顕彰した第

¹⁹ Турков А.М. Александр Блок. М., 1969. С. 239.

²⁰ Там же. С. 236.

²¹ Пят В.А. Воспоминания об Александре Блоке // Александр Блок в воспоминаниях современников в 2 томах. Т. 1. М., 1980. С. 392.

²² Бекетова М.А. Александр Блок: Биографический очерк // Воспоминания об Александре Блоке. М., 1990. С. 129.

²³ Соловьев Б.И. Александр Блок // Собрание сочинений в 6 томах. Т. 4. М., 1971. С. 21.

²⁴ Обернихина Г.А. (ред.) Литература: учебник для студентов средних профессиональных учебных заведений. 2-е изд. М., 2007. С. 462-484.

二次世界大戦以降のロシアにおいて、ブロークの「ドイツ性」をめぐる言説をデリケートな問題にしてしまった事情は容易に推測がつく。だからこそソ連崩壊後にも、アーカイヴズ公開が進むなかで、ブロークを「ロシア性」と引き離してみる動きが生まれた一方で、同時期に湧き起こっていたナショナリズム的な思潮傾向が対立し、2010年代に至るまでドイツ系の出自が論争の的になったとも推定できるだろう。

これについては第3章でも掘り下げるが、この「ナショナル」な評価をめぐる問題が現代に至るまで解決していないことは、先に引用したトゥルコフのブローク伝と同シリーズの新版である2010年のB.H. ノヴィコフによるブローク伝を見ても、その一端を窺い知ることができる。この伝記のなかで「ドイツ」に最初に言及されるのは、『自伝』を取りあげて解説を試みた、出自についての次のような説明である。

自らの精神の系譜を、彼[ブローク]は母方の家系にみいだしていた。1915年の『自伝』は、ベケートフ家の詳細な話から始まり、それからベケートフ家とメンデレーエフ家の交友について書き、ドイツのブローク家については三番目によりやく言及されている。²⁵

ブロークが、幼少期を過ごした母方のベケートフ家に強い愛着を覚えていたことは確かであり、『自伝』におけるこの言及の順序にも間違いはない。しかしこの『自伝』の叙述の順序を、そのままブローク自身の「精神」の問題にスライドさせ、かつそれを「ドイツ」と結びつけていることには疑問の余地がある。この『自伝』が元々はどういった経緯で書かれたものかを閑却しているからである。以下、その経緯について詳しく見ていく。

1-3. 『自伝』が書かれた経緯から見直す「ドイツ」問題

「はじめに」で述べたように、1915年の『自伝』は増補版であり、もとになった『自伝』が最初に発表されたのは1911年であった。これはΦ.Φ. フィドレルによって編纂された選集に収められている。この選集は、当時の小説家および詩人に自伝的文章の執筆を依頼し、それを集めたものであった。フィドレルは序文で、まず著者に25の質問リストを渡し、そのなかのすべての項目には答えなくてもよいし、形式は自由に書いてほしいと伝えたくて、執筆を依頼したと記している。注目すべきは序文に掲載された質問リストであり、その最初の5項目は次のようになっている。

1. 文学の才能は（直接遺伝的、または隔世遺伝的に）家系から受け継がれたものであるか。

²⁵ Новиков В.И. Александр Блок. М., 2010. С. 15.

父母の文学に対する愛情や読書量はどうかであったか。

2. 文学の才能を育ててくれた者、また妨げた者は誰であったか。

3. 幼年時代、青年時代の生育環境はどうかであったか。最初に読んだ本はなにか。幼少時代の人生経験はどんなものがあったか、または人生経験が欠如していたか、それらは作家の才能を伸ばすうえで、または妨げになるものとして、どのような役割を果たしたか。

4. 最初に文学作品を書いたときの想像力と観察力の役割について。

5. どのような作家（国内の、または外国の）の影響下において、最初の作品が書かれたか。²⁶

フィドレルの要望に応じて、作家や詩人たちはおのおの質問リストのなかから答えたいものを選んで書いており、回答の書き方はさまざまであるが、リストの筆頭にきている「文学の才能は […]」という質問には多くの作家が回答している。ブロークもまたその一人であり、『自伝』の様式はこの質問を強く意識したものであったことがわかる。1911年の『自伝』は、「母方の家族の多くは文学と学問に従事していた」という一文から始まり、祖父母について語ったのち、「父方の家では、僕が知る限り、文学は二次的な役割しか果たしていなかった」と述べ、父についての記述を簡潔に済ませている。一方、改稿され1915年に発表された『自伝』では、文体に若干の手を加え、全体的に加筆したうえで、上に引用した「父方の家では […]」の一文を削除しているが、全体の叙述の順序は1911年の版のまま残している。

つまり、1915年の『自伝』の記述の順序は、「父方の家では […] 文学は二次的な役割しか果たしていなかった」という文言を削除してしまったためにわかりづらくなっているものの、1911年の「文学の才能をどこから受け継いだか、父母の読書量を比べた場合どうか」という質問に応じた回答が引き継がれたものであった。また記述の多寡についても、あくまでも両親の家庭における「文学」性を答えるうえでのものであり、ロシアやドイツといった国に関係する精神の問題と結びつけて書かれたものではない。さらに母方の祖父母に関する記述が多い理由は、質問にある「隔世遺伝的にでも」という条件が、彼らの翻訳や創作活動について述べることを促したとも考えられる。

こうしたことを考慮に入れたうえであらためてノヴィコフによるブローク伝をみると、父親についての記述が母方の祖父母のあとにきていることにのみ着目し、それをブロークの「精神の系譜」（духовная генеалогия）と直接に結びつけ、かつ、文学的な影響関係の問題ではなく「家系」の問題ととらえ、詩人は母方の、ロシアの側に「精神の系譜」を見いだしていたのだとする書き方には、著述者による恣意的な解釈が含まれていると言わざ

²⁶ Фидлер. Первые литературные шаги. С. 3.

るを得ない。

同書においてこのような解釈の恣意性が問題となる箇所はほかにもある。ノヴィコフは、ブロークが少年期に従兄弟たちとともに制作していた一部限定の手書きの雑誌²⁷ について言及する段で、「ここでは父方から受け継がれたドイツ的なペダンティズムが存分に発揮されている」²⁸ と断定している。少年期のブロークの作品は、ミンツの指摘にもあるように、これまでの研究においては過小評価されがちであり、²⁹ ノヴィコフによるブローク伝においてもあまり重視されていない。そのことの正当性如何については本論の論旨から外れるため今は追究しないが、ここで問題となるのは、そのような過小評価を「ドイツ的なペダンティズム」というきわめてステレオタイプな価値基準と結びつけていることである。こうした表現は、資料を検証した結果として出てきた解釈とは言い難く、書き手の固定観念に近いものではないだろうか。

そもそも血縁や国籍といったもので作家や作品を論じようという行為自体に、危うさが含まれるのは避けがたいことであろう。しかしだからといって、ブロークにとっての「ドイツ」を語ることで自体が無意味であるかといえば、それは違う。

イワノワも述べるように、ブローク自身に、自分にはドイツ人の血が流れているという意識が強くあった以上、概念そのものを切り捨てることはできない。³⁰ では、このことが作品の研究上有効になりうるのは、どのような場合だろうか。それはたとえばクニャジニンのように、ブロークが不在の父親とのつながりを「ドイツ的なもの」に感じとっていたため、それが文学の好みに影響したと推定し、少年期に B.A. ジュコフスキーを好んでいた理由のひとつにそのドイツ文学的な世界観を見出すような場合ではないだろうか。³¹ このような場合は、ブロークの抱いていた「ドイツ」のイメージのより近づくアプローチとなり、出自の問題をふまえることの重要性は十分に保たれるであろう。

さらに、ブロークの意識という角度から「ドイツ性」の問題を掘り下げるときに重要になってくるのは、コルネイ・チュコフスキーらブロークと直接交流のあった同時代人が、批評等のなかで度々ブロークの「ドイツ的な」性質に触れていることで、それらの文章がブローク自身の自己規定になんらかの影響を与えていた可能性は大いに考えられる。

1-2 の冒頭に引用したブロークの書簡における、自分の計画的な性格を「ドイツ人の血」に結びつける発言も、こういった文脈のなかでとらえるべきであろう。

²⁷ この手書き雑誌の詳細については *Мицц 3.Г.* Рукописные журналы Блока-ребенка // Блокковский сборник. № 2. Тарту. 1972. С. 292-308. を参照。

²⁸ *Новиков.* Александр Блок. С. 20.

²⁹ *Мицц.* Рукописные журналы Блока-ребенка. С. 292.

³⁰ *Иванова.* О немецких предках Блока. С. 253.

³¹ *Княжнин.* Александр Александрович Блок. С. 13.

第2章 幼少期における文学の影響

2-1. ベケートフ家の「文学的」生育環境

ブロークの幼年期が語られるとき、その周囲が非常に女性的であった、ということがしばしば言われる³² ほか、彼女らに溺愛されて育ったことによって強い自己愛が築きあげられたのだ、という若干単純化された見方³³ がなされることもある。実際、ブロークは幼少期、彼を産んだとき 20 歳であった母アレクサンドラとその姉妹（つまりブロークの伯母エカテリーナ、ソフィヤ、叔母マリヤ）、さらに祖母エカテリーナ、曾祖母アレクサンドラといった女性たちに囲まれて育っている。だがここで重視すべきはむしろ、女性ばかりに囲まれていたこと以上に、彼女らがどのような人物であったかであろう。

ブロークの祖父、アンドレイ・ニコラエヴィチ・ベケートフは、当時のロシアの女性教育において最も進んだ考えの持ち主であった。女性の高等教育制度の確立のために尽力したことで知られ、1878 年には彼が中心となってロシアで初めての本格的な女子大学であるベストウージェフ学校を開設した。校名こそ歴史学者の K.H. ベストウージェフ＝リュエミンからとられているが、マリヤはこれについて、ベケートフ学校と名付けられても不思議はなかった³⁴ と記している。アンドレイを中心とした一家の女性たちは、それぞれが学問に造詣を有し、翻訳や創作などに積極的に取り組んでいた。

四姉妹の母親で、詩人の祖母にあたるエリザヴェータは著名な翻訳家だった。ブロークは、祖母がアントン・チェーホフの短編をフランス語に翻訳した際には、チェーホフ本人から感謝の手紙を貰ったという話や、ドストエフスキーが祖母に直接「この小説を訳してほしい」といって英語の小説を持ってきたことがあり、自分はそれを大事に保管している、といった逸話を記している。³⁵

ブロークは『自伝』のなかで、このベケートフ家の文学的な環境について、まず、家庭内で古風な文学観や理想が共有されていたことを評価し、そのおかげで自分が初めて親しんだ文学がヴェルレーヌやデカダン派などではなかったことに感謝していると述べている。そして自分が最初に詩的感動を覚えた詩人はジュコフスキーであったと記し、さらに念を押すように、この家の価値観のおかげで、いわゆる「新しい詩」（новая поэзия）には大学に入るまで触れずに育ったこと、ベケートフ家のなかでは母親だけが新しいものを追う性質があったことなどを記している。³⁶

³² Турков. Александр Блок. С. 7.

³³ Тимофеев Л.И. Александр Блок: Очерк жизни и творчества. М., 1946. С. 22-23.

³⁴ Бекетова. Александр Блок: Биографический очерк. С. 23.

³⁵ Блок. Соб. соч. Т. 7. С. 10-11.

³⁶ Там же. С. 12.

これはとりわけ初期作品の研究においてしばしば引用される一節であり、これを受けてブロークの詩の原点がフランスの象徴派よりもロシア詩からの影響からの影響のもとにあったと主張されることも多い。たとえば『A.A. ブロークの初期抒情詩（1898-1904）——宗教的シンボリズムの詩学』（2013年）は、ブロークの初期抒情詩を専門に扱った研究書であるが、著者 T.B. イゴシェワはこのなかで、まず B.M. ジルムンスキーが、「ロシアの象徴主義は[…] ジュコフスキー、チュツチェフ、フェートの流れを汲むものである」³⁷ と述べている文を引用し、次に上述のブロークの『自伝』の記述を引き、さらにマリヤが「[ブロークが] ウラジーミル・ソロヴィヨフの詩を初めて読んだのは 1900 年以降、つまり大学二年生以降であった」³⁸ と書いていることに言及したうえで、1900 年頃までのブロークの初期抒情詩を、主にジュコフスキーやフェートからのロシア詩の伝統を直接受け継ぐものと位置づけている。³⁹ また、母親が少年期のブロークに与えた影響を検証する際には、「ブロークの母は宗教的な性質であった」と記述しているマリヤの回想にもとづき、宗教性や神秘性といった要素が影響を与えたのだとし、同書の副題ともなっている「宗教的シンボリズムの詩学」に見合う「宗教的なブローク」像を前面に押し出している。⁴⁰

これは一読したところ、ブローク自身による『自伝』とは齟齬のない解釈である。また、ブロークが母親の神秘主義的な傾向に影響を受けたことは、ブローク自身が「神秘的」なものに対する憧れを抱いていたと語っていることや、妻リュボーフィに宛てた書簡のなかで母親の性質について、神秘的な考え方をする人だと述べている⁴¹ ことなどを併せて考えてみれば、一定の説得力がある。だがこの問題を考えるときに看過してはならないのは、ブロークの母親が翻訳していたボードレー、ヴェルレーヌなどのフランス詩の問題である。この点においてはマリヤの回想こそ『自伝』の叙述を肯定するものになっているが、ブロークの妻リュボーフィの回想では、「ブロークの家庭は文学的感性に敏感」であったため、「フェートやヴェルレーヌやボードレーを少年時代から読んでいた」⁴² と、フェート、ヴェルレーヌ、ボードレーを並列させており、ブロークやマリヤの記述との間に、認識の隔たりがみられる。むしろ、リュボーフィの回想にはほかにもブローク自身の叙述と食い違う部分が多くあり、そうでなくとも同時代人の回想をそのまま事実と捉えることはできないが、少なくともこの件については、もう少し慎重に見ていく必要があるだろう。

³⁷ Жирмунский В.М. Теория литературы. Поэтика. Стилистика. Л., 1977. С. 202.

³⁸ Бекетова. Александр Блок и его мать. С. 52-53.

³⁹ Игошева Т.В. Ранняя лирика А.А. Блока (1898-1904): поэтика религиозного символизма. М., 2013. С. 34-43.

⁴⁰ Там же. С. 36.

⁴¹ Блок А.А. Александр Блок. Письма к жене // Литературное наследство. Т. 89. М., 1978. С. 100.

⁴² Блок Л.Д. Блль и небылицы о Блоке и о себе // Жизни гибельной пожар. М., 2012. С. 95.

2-2. 少年期のブロークは「新しい詩」を読んでいたのか

とはいえ、これまでの研究者がすべて1915年の『自伝』の記述を額面通りにとらえてきたわけではない。3.G. ミンツは、『自伝』のこの箇所について言及する際に、母親が訳していた現代フランス詩があったのだからそれを読んではいたはずだと指摘し、『自伝』中の「読んでいなかった」というのは、実際には読んでいなかったというよりは「自主的に愛読してはいなかった」という意味だろうと解釈したうえで、1898年から1900年までの初期の詩は、確かに当時の「新しい詩」の潮流には与することのないものとして、ブローク独自の詩学の分析を試みている。⁴³

これは、詩人の発言に沿う形でその詩人独自の詩学を分析するという点においては、正確かつ妥当な視座であろう。だが、本当に「自主的に愛読してはいなかった」のか、またそれらを愛好していたのは本当に母親だけであったのかといった問題も、一考に値するのではないだろうか。この問題に具体的に踏み込んだ近年の研究としては、ブロークの母の翻訳詩を洗い直し、あらたにブロークの初期作品との比較分析をしたB.K. チェホモフの論文が挙げられる。⁴⁴

チェホモフはこの論文のなかで、ロシア科学アカデミーロシア文学研究所(ИРЛИ РАН)のアーカイヴズに保管されているブロークの母の訳詩を分析し、ブロークの初期詩編との強い関連がみられることを指摘している。また、1895年5月、ブロークが14歳のときに母親にプレゼントしたノートに、ジャン・リシュパン、シュリ・プリュドム、ポール・ヴェルレーヌの詩をフランス語原文で清書してあること、そこで書き写したヴェルレーヌの有名な詩「空は屋根の上にありて……」(Le ciel est par-dessus le toit...) にブロークが多大な感銘を受けた可能性を指摘している。チェホモフも言及しているように、1907年にФ.К. ソログロフがヴェルレーヌの訳詩集をブロークに贈ると、ブロークはその返信のなかで、これははるか昔に読んで以来ずっと記憶にとどめていた詩だと記し、「初恋を知ったころ…… [このフレーズはフェートの詩の引用] から、自分はこの詩が好きだった、「そして昨今の、自らを疑う苦しみの日々において […]、この詩のモチーフや言葉は今も変わらず、僕とともにある」⁴⁵ と書き送っている。

ここでブロークがいう「初恋」とは、1897年、ブロークが16歳のときに母親とマリヤとともに訪れたドイツの保養地バート・ナウハイムで出会ったサドフスカヤ夫人との関係

⁴³ Минц З.Г. Блок и русский символизм // Александр Блок и русские писатели. СПб., 2000. С. 471-479.

⁴⁴ Чехомов В.К. Французские поэты в переводах А.А. Кублицкой-Пиотгух // Шахматовский вестник. № 12. М., 2011. С. 382-388.

⁴⁵ Блок. Соб. соч. Т. 8. С. 219.

であり、ブロークが詩を大量に書き始めた時期と重なっている。⁴⁶ つまり、最初の大きな創作意欲を引き起こした初恋についての言及をする文脈において、少年時代に好んでいたフェートの詩を引用しつつ、同時に、その頃から 1907 年当時までヴェルレーヌのこの詩がずっと頭にあった、と記しているわけである。これらのことを考えると、少年時代にヴェルレーヌを「自主的に愛読してはいなかった」とすることや、初期の詩への影響があまりないと考えることには、いくぶん無理が生じてくるのではないだろうか。

さらにチェホモフの論文において興味深いのは、1896 年に新聞に掲載されたゴリキーによる記事「ポール・ヴェルレーヌとデカダン派」についての指摘である。ゴリキーが引用したヴェルレーヌの詩二篇のうち、一篇には訳者名が明記されておらず、もう一篇が「クブリツカヤ=ピオトゥフ夫人 [ブロークの母] による訳」となっている⁴⁷ が、これは誤りで、実際にはブロークの母の訳とされている詩はエリザヴェータ・ベケートワ、つまり当時著名な翻訳者であったブロークの祖母による訳であり、もう一篇の訳者名の明記のない詩のほうがブロークの母による翻訳であったという。⁴⁸

そうすると、『自伝』のなかの「母親だけが新しいものを追う性質があった」という記述にも慎重になる必要が出てくる。少なくとも 1896 年、すなわちブロークが 15-16 歳の少年であった時期においては、ヴェルレーヌが母親とブロークのあいだのみではなく、もう少し広くベケートワ家のなかで読まれていた可能性が強まってくるのである。

ではブロークは、なぜ『自伝』のなかで現代フランス詩への愛着を母親だけに限定するような記述とともに、他のベケートワ家の人々はより古風な文学を好んだとし、「文学への興味はヴェルレーヌやデカダン派から始まったわけではない」「大学に入ったころまでは、いわゆる『新しい詩』を読んでいなかった」といった主張をしたのだろうか。

2-3. 『自伝』が書かれた経緯から見直す文学の影響問題

『自伝』のなかでブロークが「新しい詩」(новая поэзия) と書いたとき、彼の念頭にあったのは、むしろ、Д.С. Мелешкоフスキーに始まる議論であろう。周知のように、メレシコフスキーは、1892 年に講演し、翌年に活字化された『現代ロシア文学における衰退の原因と新思潮について』のなかで、「新しい芸術の三つの重要な特徴は、神秘的な内容、シ

⁴⁶ この「初恋」の経緯については、Жаравина Л.В. Письма А.А. Блока К.М. Садовской // Блоковский сборник. № 2. Тарту. 1972. С. 309-324. を参照。

⁴⁷ Горький А.М. Поль Верлен и декаденты // Собрание сочинений в 30 томах. Т. 23. М., 1953. С. 132.

⁴⁸ この誤記は 1953 年のゴリキー全集におけるものであり、チェホモフも断りを入れているように、該当記事の初出紙 «Самарская газета» 1896 年 85 号は РГБ 等の新聞アーカイヴズ等には保管がなく、誤記が新聞掲載の時点からのものであったのかどうかは現時点では確認がとれていない。

ンボル、芸術的感性の拡大である」と定義した。⁴⁹ これを皮切りに象徴主義の詩人たちが議論を展開した、「新しい芸術とはなにか」、「新しい詩とはなにか」という主題は、象徴主義の概念と密接に結びつくものであった。したがって、象徴主義が決定的な危機を迎えていたさなかに書かれた『自伝』において、ブロークが象徴主義に関連するものから意識的に距離を置いた書き方をしていたと考えることもできるだろう。以下に検証してみよう。

この場合においてもやはり、第1章で扱った出自の問題と同様に、『自伝』の1911年と1915年の版との異同が重要になる。というのも、1911年の『自伝』には、母親についての記述こそあれ、ヴェルレーヌや「新しい詩」への言及はみられず、当該の記述は1915年の版において書き足されたものだからである。

では、先に見た1907年のソログープ宛ての書簡では、少年期にヴェルレーヌから受けた影響を明確に認めていたブロークに、1911年から1915年までの間になにが起こったのか。ブロークの象徴主義観はこの期間にどう変化していたのであろうか。これについては少しさかのぼった時期から確認しておく必要があるだろう。

ブロークと象徴主義とのあいだには、かなり初期の段階から距離が生まれている。ミンツも指摘するように、ブロークが最も意欲的に象徴主義の精神を会得していったのはB.C. ソロヴィヨフの詩や著作に出会った1900年から1903年にかけてであり、まだ詩人としては世に知られていなかった時期である。そしてデビューから詩人としての名声を急激に高めていった1903年以降は、最初に象徴主義に疑問を感じ始めた時期と重なる。⁵⁰

その後、1903年から1906年の連詩『岐路』《Распутья》を経て、1907年から1908年にかけて同時代および19世紀のリアリズムの作家を高く評価し、象徴派の論陣と対立していった経緯はあまりにも有名だが、とりわけ1908年の秋以降は「新しい芸術」や「新しい詩」の潮流そのものを否定し、ヴァチェスラフ・イワノフらとも激しく対立して文壇のなかで一段と孤立する。⁵¹

だがこの対立に変化が訪れる。ミンツによれば、メレシコフスキーおよびギッピウスとブロークの書簡は、はじめの数年こそ象徴主義をめぐる議論を戦わせているが、しだいに手紙のやりとりは減少し、簡素になる。しかしこれは必ずしも彼らとの関係が絶たれたことを意味するものではなく、ブロークは1912年ごろ定期的にメレシコフスキー一家を訪れている。当時の日記には、「一日中メレシコフスキーの家に行った。新しい、豪華で居心地の悪い部屋に暮らす、彼らはみな愛すべき、孤独な、悲しい、独り身の者だ」（1912年

⁴⁹ *Мережковский Д.С. О причинах упадка и о новых течениях современной русской литературы // Полное собрание сочинений Д.С. Мережковского в 24 томах. Т. 15. СПб., М., 1912. С. 250.*

⁵⁰ *Минц. Блок и русский символизм. С. 471-487.*

⁵¹ Там же. С. 496-503.

11月25日)⁵²「[...] メレシコフスキー家に寄った。彼らはかなり調子が芳しくない。ジナイダ・ニコラエヴナ [ギッピウス] はすっかり弱って病身だ。ドミートリー・セルゲーヴィチ [メレシコフスキー] は部屋にこもっている」(1912年12月29日)⁵³ といった記述がみられる。またブロークは1910年代前半、彼らとの論争を過去のものとして総括するような文章を書こうとした形跡があり、⁵⁴ ミンツは上に挙げたブロークの日記などと併せて考えると、当時のブロークがメレシコフスキーらとの関係において、「理論」より「人間的な関係」を重視するようになっていたのだらうと述べている。⁵⁵

同じような変化は、他の象徴派の詩人たちとの人間関係においても生じている。たとえば、1911年の10月30日の日記には、アンドレイ・ベールイとの関係にまつわる次のような記述がみられる。

ボーリャ [アンドレイ・ベールイ] に長い手紙を書いている。[...]

書きながら、考えた—僕たちは「心理学」を批判してきたし、それは昨日アカデミーでヴァチェスラフ・イワノフが話したように、僕たちが「無性格な」時代を生きてきたからだ。その時代は終わった。だから僕たちにはまた、心のすべてが、生活のすべてが、人間のすべてが必要なのだ。⁵⁶

残念ながらこのときのベールイ宛の書簡は残されていないが、⁵⁷ 日記から推察する限りでは、当時のブロークが多くの人間関係において、それまでの論争をいったん終わらせて、人間的な関係を重視するよう試みていた様子がうかがえる。メレシコフスキーらとの関係は、作品を送りあうことや、実際に会うことによって続けられていたが、1915年にブロークが評伝『アポロン・グリゴリエフの運命』を発表すると、ギッピウスはこれを厳しく批判する書簡を書き、それが彼女からブロークへの最後の書簡となる。⁵⁸

以上は、主にミンツの研究によって明らかにされてきたブロークと象徴主義の関係の経緯である。ブロークの『自伝』は、まさにこういった転換のあった1911年から1915年の期間に改稿されたものであり、とするならば当然それを考慮したうえで、『自伝』におけ

⁵² Блок. Соб. соч. Т. 7. С. 184.

⁵³ Там же. С. 198.

⁵⁴ Минц З.Г. Блок в полемике с Мережковскими // Александр Блок и русские писатели. СПб., 2000. С. 598.

⁵⁵ Там же. С. 597-599.

⁵⁶ Блок. Соб. соч. Т. 7. С. 79.

⁵⁷ Там же. С. 476.

⁵⁸ Минц. Блок в полемике с Мережковскими. С. 605.

るヴェルレーヌや「新しい詩」への言及を考えてみる必要があるだろう。

上述の経緯をふまえてあらためて 1915 年の『自伝』を見直すと、ブロークの叙述は、象徴主義的なもの、とりわけヴェルレーヌを強く意識したうえで、意図的にそこから距離を置こうとしている形跡がみられる。この「意識」がみられる部分に波線、「距離」がみられる部分に直線をひいて次に整理しよう。

①「あの家では古風な文学的価値や理想が尊重されていた。通俗的な、ヴェルレーヌ的な言い方をすれば、éloquence [雄弁, 美文] が重んじられていたのだ」

これはベケートフ家が文学を好んでいたと説明する箇所だが、ヴェルレーヌやデカダン派から文学への興味を持ったわけではないということを言うための前置きとして、わざわざヴェルレーヌを引いて、それを「通俗的な」いいまわしであるとしている。

②「母ひとりだけが、絶えず激しく、新しいものを追い求める性質があり、僕の musique を求める傾向は母が支持してくれた」

自らの「音楽性」に言及する箇所だが、わざわざ musique とフランス語を用いているのは、むしろヴェルレーヌの「なによりもまず音楽を……」(De la musique avant toute chose...) が念頭に置かれていると考えられる。つまりヴェルレーヌを引用したうえで、それを家族のなかでは母親のみの好みであったとしている。

③「愛しい、古風な éloquence に、自分は死ぬまで恩義がある、そのおかげで自分にとっての文学がヴェルレーヌやデカダン派から始まったわけではまったくないからだ」⁵⁹

これは①②に続く記述であり、これが『自伝』中におけるヴェルレーヌへの最後の言及となっている。少年期のヴェルレーヌからの影響を否定し、ベケートフ家の古風な文学趣味を強調する文脈において、再びヴェルレーヌの言葉を用いているのである。

この直後の段落にジュコフスキーやポロンスキーへの言及があり、その数段落後に念を押すように、少年時代には「新しい詩」を「読んでいなかった」という叙述がなされる。しかし、このように『自伝』の叙述自体、注意深く見るならば矛盾をはらんだ、両義的ともとれるものである。これを、先に見たチェホモフの論などと突きあわせて考えるならば、この「読んでいなかった」という表現は、文字通りに受け止められるものではないだろう。

イゴシエワをはじめこれまでの研究においては、マリヤによる伝記が、ブロークの記述を裏づけるものであるかのように引用されることも多かった。確かにマリヤは、少年期のブロークに影響を与えた詩人として「フェート、ポロンスキー、チュツチェフ」を挙げている。しかし、マリヤはその直前に『自伝』から上掲の箇所を引用しており、意識的にブロークの叙述と矛盾しないように書いているのである。つまり、マリヤによる伝記のこの

⁵⁹ ①②③ともに Блок. Соб. соч. Т. 7. С. 12.

部分は、1915年版の『自伝』の叙述を、幼少期からブロークにじかに接してきた人物が別の視点から傍証したものというよりは、むしろ、ブロークの叙述をそのままなぞって書かれたものとして読むべきであり、少年期におけるヴェルレーヌらの影響を否定することの裏づけとしては不適切であるといわざるを得ない。

第3章 二つの論点にまたがる問題

3-1. 「彼はナショナリストではない」

第1章で見てきたドイツ系の出自および「ドイツ性」をめぐる問題と、第2章で見てきた幼少期の生育環境におけるフランス象徴派の影響の問題は、それ自体では一見、さほどの関連性がないようにみえるかもしれない。しかしこれを、ブロークという「ロシアの詩人」の『伝記』を記す際のバイアスの問題として捉えたとき、両者のあいだにある共通点が浮上する。

それは、その時代ごとに「前提としなければならない見解」の存在である。一昔前ならば、「ソ連の公式見解」であると括ってしまうこともできたかもしれない性質のものではあるのだが、しかしソヴィエト崩壊後も、現在に至るまで、それはさまざまな形で現れている。これは、著述者が読者と共有しようと認識する価値観——アーネスト・ゲルナーの言葉を借りるならその「観念や信条体系」⁶⁰の見地から、作家なり詩人なりの伝記を記述しようとする際に生じる問題点である。それは、その外部からさまざまな文脈や背景を把握したうえで見ているときには、解釈の歪みや不適切さを明確に見とることができるが、同一の信条体系を持った者からは見えづらくなる性質のものである。

この種の問題は、とりわけ作家や詩人というものが、あたかも特定の「国家」のシンボルのように扱われた場合に、顕著に表れる。

もしブロークを、「ロシア」という国家を代表する詩人ととらえるならば、これまで述べたことに関して、次のようなバイアスが働いていると考え得る。すなわち、第1章の場合は、ブロークが「ドイツ」系の出自を持っていることが、とりわけ二国間の対立や民族主義的気運が高まる時期には、好ましくないことと捉えられがちになるし、第2章の場合は、「フランス象徴主義」の影響を受けた詩人よりも、ロシア詩の伝統を正統に受け継ぐ詩人として方向づけたほうが好ましいとする価値判断が働きがちになるだろう。

ブロークが創作において「ロシア」をテーマとして扱っていることは、このバイアスからみて都合の良いものであり、1-2でも触れたように、学校教育においても生徒や学生に

⁶⁰ アーネスト・ゲルナー（加藤節監訳）『民族とナショナリズム』岩波書店、2000年、205頁。

「祖国」の問題として考えさせるような問いが課せられている。第1章で見てきた論争の背景にあった現代のナショナリズム的な思潮傾向は、こういった教育の方向性にも反映されていると考えることができるだろう。しかしここで確認しておきたいのは、ブロークが「ロシア」と繰り返すとき、それはナショナリズムの期待するような「国」の概念なのだろうかということである。この観点からこの問題を考えるときに、見落としてはならないものがある。それは、ブロークが1916年に戯曲『薔薇と十字架』の劇場での上演用に記したメモである。ここでブロークは、主人公ベルトランは何よりもまずヒロインのイゾーラを愛しているのだと書いたうえで、次のように記している。

ベルトランは故郷をも愛している、だがそれはどんな故郷に対してであろうと、我々が本当に愛するときの愛し方でのことだ。つまり、我々の言葉でいうなら、彼はナショナリストではない、ただ彼はフランス人であり、彼には彼の *ma dame France*⁶¹ が、彼の夢のなかだけに存在していた […]。⁶²

『薔薇と十字架』におけるベルトラン像にブローク自身の投影がみられることは、これまでも多くの指摘がある。⁶³ またこのメモに描かれたベルトラン像は、初期の抒情詩で夢のなかの女性像や麗しの貴婦人像を謡い、『クリコヴォの野で』（На поле Куликовом）（1908年）において「おお、ルーシよ！ 我が妻よ！」（О, Русь моя! Жена моя! …）と謡いあげたブローク自身の姿勢と重なる点も多い。そのベルトランを、ブロークが「ナショナリストではない」としていることには、どのような意図が込められているのだろうか。

むろん、ナショナリスト（националист）という言葉とそれが指し示す概念には、膨大な解釈と論争の歴史がある。しかし、ここでブロークのいう「ナショナリスト」の意味を探ることは、決して無謀なことではない。というのも、ブロークの生きた19世紀末から20世紀初頭において、これは比較的新しい言葉であり、それまでに誰によって、いつ、どのように用いられてきた語であるかということが、重要な鍵となってくるからである。⁶⁴

⁶¹ この部分は1961年の8巻全集では「*ma dame France*」となっているが、1923年のベルリン版9巻全集（Собрание сочинений Александра Блока в 9 томах. Т. 6. Берлин. 1923. С. 121.）および1971年の6巻選集（Собрание сочинений в 6 томах. Т. 4. М., 1971. С. 446.）では「*la douce France*」となっている。

⁶² Блок. Объяснительная записка для художественного театра // Соб. соч. Т. 4. С. 534.

⁶³ 小平武『『薔薇と十字架』の世界へ』アレクサンドル・ブローク（小平武、鷺巣繁男訳）『薔薇と十字架（平凡社ライブラリー1100）』平凡社、1995年、201-224頁。

⁶⁴ ロシア語においてこの語が一般に定着し、辞書内に独立した項目が設けられるのは革命以降であり、さらにソヴィエトの公式見解が確立して以降は、これが「ブルジョア的な」政治動向であるとの定義がアカデミー版の辞書（Словарь современного русского литературного языка. Т. 7. М.-Л., 1958.）

ロシア語における「ナショナリズム」「ナショナリスト」という言葉の早い時期の使用としては、A.I. ゲルツェンが1843年11月の日記のなかで否定的な意味あいを用い、⁶⁵ その後『過去と思索』においても使用していることが挙げられる。⁶⁶ ただし、当時の刊行物などにはあまり使用がみられず、一般的なロシア語に浸透していたとはいいがたい。⁶⁷ これはもちろん民族や民族性についての議論がなされていなかったことを示すものではなく、「民族性」(национальность)についての言及はゴゴリやドストエフスキーをはじめ多くの作家にみられるが、当時この概念は「民衆性」(народность)とほぼ同義とされ、⁶⁸ 「民衆」(народ)と密接に結びつく概念であり、世界各国間の緊張関係が深まる19世紀末から20世紀初頭にかけて展開された、いわゆる「国民国家」の概念と結びつくような「ナショナリズム」の言説とは、いったん分けて考える必要がある。

しかし、1870年代末から1880年代に入ると、K.H. レオンチエフが『隠者の手紙』(1879年)、『ワルシャワ日記』(1880年)、『東方問題についての書簡』(1882年)などの著作のなかで「ナショナリズム」という言葉を頻繁に用いるようになる。レオンチエフは、下に例示するように、「ナショナリズム」を本質的に肯定的な意味あいを持つ言葉として用いていた。これに対しB.C. ソロヴィヨフは、御子柴道夫も述べるように、『大論争とキリスト教政治』(1883年)および『ロシアの民族問題』(1884年)において、ナショナリズムを「他のもろもろの民族性から孤立して、意識的な排他性のなかで尖鋭化し、その鋭さを他のすべての民族に向けるような民族性」であるとし、その問題性を指摘した。⁶⁹

はじめは友好的であったソロヴィヨフとレオンチエフの関係は、晩年において激しく悪化するが、⁷⁰ 「ナショナリズム」に対する姿勢においては、この語の使用の初期から両者に

C. 642-643.)にも掲載されることになるが、これはあくまでも後になってからの話である。

⁶⁵ 1843年11月24日の日記。ゲルツェンはT.H. グラノフスキーの講演に感銘を受けたという文脈において、「狭量なナショナリストにとって打撃となる」素晴らしい講演であったと記している。

Герцен А.И. Сочинения в 9 томах. Т. 9. Дневник 1842-1845; Письма 1832-1870. М., 1958. С. 130.

⁶⁶ *Герцен А.И.* Собрание сочинений в 30 томах. Т. 9. Былое и думы. Ч. 4. М., 1956. С. 135. ゲルツェンがこの語を用いた経緯については、藤本治「十九世紀ヨーロッパにおけるナショナリズムとインターナショナリズム：ミシュレの『北方の民主主義伝説』とゲルツェンの『ロシア民族と社会主義』をめぐって』『一橋論叢』第51巻3号、日本評論社、1964年、345-355頁を参照。

⁶⁷ ダーリの辞書においても、第二版に至るまで、нацияの項目は存在するものの、национализмの項目はみられず(Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля. 2-е изд. Т. 2. М., 1881. переизд. 1955. С. 493.)、第三版(いわゆる「クルトネ版」)でнацияの項目内に語義が追加される。(Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля. 3-е испр. и значительно доп. изд. / под редакцию И.А. Бодуэна-де-Куртенэ в 4 томах. Т. 2. СПб.-М., 1905. С. 1284-1285.)

⁶⁸ Толковый словарь живого великорусского языка Владимира Даля. 2-е изд. Т. 2. С. 493.

⁶⁹ 御子柴道夫『ソロヴィヨフとその時代 第二部 1882-1900(ソロヴィヨフ著作集別巻2)』刀水書房、1982年、51-52頁。

⁷⁰ 同上、109-113頁。

明確な差異がみられることは興味深い。

レオンチエフのナショナリズム観は、上掲の著書に加え、晩年の著作『世界革命の武器としての国家政治』（1888年）によく表れている。レオンチエフはソロヴィヨフ宛の書簡のなかでも、この書の一節を自ら引用し、次のように主張している。

もしスラヴ主義者・文化愛好者がホミャコフやダニレフスキーが犯した過ちを——彼らが偉大な師と仰ぐ者たちの解放運動の迷走を——繰り返したくないと願ひ、彼らにとって重要な、崇高な使命、すなわち、我々の精神と生活様式を統一する真のナショナリズムに奉仕したいと願うのなら、全スラヴ人の問題はあまり早急に解決しようと焦らないほうがいだろう。⁷¹

このレオンチエフの書簡は、ソロヴィヨフ宛に書かれてはいるものの、その主旨は愛国的論客の П.Е. アスターフィエフとの論争をふまえて自らの見解を述べたものであり、上に引いたような「真のナショナリズム」を自らがいかに理解しているかを強調するために、「私のほうが彼 [アスターフィエフ] よりずっとナショナリストだ」⁷² とまで主張する。

一方、これを受け取ったソロヴィヨフは、それまでの著書で述べていたナショナリズムについての考察をさらに深め、『善の弁明』において、レオンチエフと正面から対立する見解を述べた。『善の弁明』は、ソロヴィヨフが 1894 年から発表をはじめ、1897 年に単行本の初版が出された哲学書である。3 部構成となっているが、そのうち「人類の歴史のなかの善」と題された第 3 部は、善の直面する社会的問題を扱っており、A.H. ゴルベフと Л.В. コノヴァロフも指摘するように、⁷³ 当時のロシアおよび西欧社会の矛盾を摘発する、緊迫した社会性を持っていた。民族主義の問題が正面から扱われているのは、この第 3 部の第 14 章「倫理的観点からみた民族の問題」である。ソロヴィヨフはここで「誰に対するものであれ本当の愛は、我々がその者に対し精神面だけでなく物質面においても、あらゆる幸福や利益を願うことである」としたうえで、「自らのためであろうと、友人のためであろうと、自らや友人の家族のためであろうと、さらにはたとえ自らの住む町や地域全体のためであろうと、犯罪を行ってまでその幸福や利益を願ってはならないという根本的真実には、かなりの程度の人が賛成するだろう。しかしこれがひとたび『自らの民族のため』となると、この明々白々たる真実に途端に陰りがさし、曇ってしまうのである [強調は原文 (以下同)]」として、民族主義の危険を訴えている。さらにこれに続く記述では、

⁷¹ Леонтьев К.Н. Кто правее? Письма Владимиру Сергеевичу Соловьеву // Котельников В.А. (гл. ред.) Полное собрание сочинений и писем в 20 томах. Т. 8-2. СПб., 2009. С. 71-72.

⁷² Там же. С. 170.

⁷³ Голубев А.Н., Коновалова Л.В. Владимир Соловьев и его нравственная философия // Соловьев В.С. Оправление добра. М., 1996. С. 15.

はっきり「ナショナリズム」という言葉を用い、「これは、民族のためのように見せかけて、単に民族のエゴイズムのためである。このようなナショナリズムは歴史において顕在化している […]」⁷⁴と警告する。

これまでの研究では、ブロークが『善の弁明』を読んだ形跡があることこそ指摘されていたが、⁷⁵ ブロークによる同書への言及が、1903年の「よくわからない」、⁷⁶ 1904年の「退屈だ」⁷⁷といった否定的なものであることや、同時代人のГ.И. チュルコフが「ブロークは『善の弁明』を最後まできちんと読んでいなかったのではないか」⁷⁸と記していることなどから、同書の直接的影響についてはあまりないものとされがちであった。

しかしブロークのソロヴィヨフに対する姿勢は、かならずしもそう一貫性のあるものではない。このことはブロークの象徴主義に対する距離の取り方の推移と深く関係しており、2-3でも見てきたように、1903年から1904年というのは、ブロークが初めて意識的に象徴主義的なものから離れていこうとしていた時期にあたる。実際、象徴主義との対立に変化の訪れる1910年代に入ると、ブロークは再びソロヴィヨフを高く評価するようになり、『自伝』においてもソロヴィヨフの強い影響を認めている。

こうした経緯を考慮するならば、ブロークが記した戯曲『薔薇と十字架』上演用のメモに「ナショナリスト」という言葉を記したとき、まず念頭にあったのは、ソロヴィヨフの思想ではないだろうか。傍証となりうる根拠は次の3点である。①『善の弁明』が単著として刊行されたのは1897年であり、1899年には改訂第二版が出版された。その反響が広まっていた1900年こそ、ブロークがソロヴィヨフの著作に出会い、心酔しはじめた時期である。その後の1903年から1904年にかけて象徴主義に疑問を抱き始めた時期に『善の弁明』を否定的に評価したとしても、それは第2章で見たヴェルレーヌの場合に似て、意図的に距離を置こうとした態度であった可能性が高い。②戯曲『薔薇と十字架』は1912年から1913年に書かれたが、この作品自体が、ソロヴィヨフの強い影響をうけていることが指摘されている。⁷⁹ この時期の他の著作におけるソロヴィヨフへの言及と併せて考えても、1910年以降は再びソロヴィヨフに立ち返っていた時期であり、その上演用のメモのなかでソロヴィヨフを意識した発言をするのはごく自然なことと考えられる。③さらに、ブロークがこのメモのなかで「本当に愛する」という表現を用いたうえで、「つ

⁷⁴ Соловьев. Оправление добра. С. 259-260.

⁷⁵ Турков. Александр Блок. С.52, 62.

⁷⁶ Там же. С. 52.

⁷⁷ Там же. С. 62.

⁷⁸ Чулков Г.И. Годы странствий. М., 1999. С. 159.

⁷⁹ Рычков А.Л. «Рыцарь-монах» и «Рыцарь-странник» Вл. Соловьев и драма А. Блока «Роза и Крест» // Соловьевские исследования. № 4. Иваново. 2013. С. 173-185.

まり […] 彼はナショナリストではない」としている叙述は、ソロヴィヨフが『善の弁明』において「本当の愛」の説明から「ナショナリズム」の危険性を訴える主張へと続く叙述の形式に酷似している。⁸⁰

これらのことを総合的に考えると、ブロークがソロヴィヨフの思想の影響のもとに『薔薇と十字架』上演用のメモを書いた可能性は充分にありうるといえるだろう。仮にそれが直接的影響でないとしても、少なくともブロークがナショナリズムに対し、ソロヴィヨフに近い見解をもっていたことは明確である。つまり、ブロークが「彼はナショナリストではない」と書いたとき、そこにはレオンチエフの「我々の精神と生活様式を統一する真のナショナリズム」というような思想に対し、抵抗する意識があったものとみてとれる。

これを理解することなく——ましてレオンチエフ的な見地から——ブロークの「ロシア性」を考察したとしても、それは作品の理解に近づくものではなくなくなってしまおうだろう。

3-2. 解釈の歪みはどこに生じているのか

作家や詩人の伝記を著述する場合には、むろん、自伝的記述や書簡をはじめとしたさまざまな資料を、その成立の時期や執筆の経緯や動機などによって多くの条件がかかっていることを認識し、注意深く検証をする作業が必要になる。しかし、それらの作業を行ったうえでも、依然として著述者がそれを「いかに」叙述するかという問題が残る。つまり、レイモンド・ゴイスの定義を借りるなら、少なくとも「叙述的 (descriptive)」なレベル、場合によっては「蔑視的 (pejorative)」あるいは「肯定的 (positive)」なレベルにおいて、著述者の持つなんらかの信条体系の反映から多かれ少なかれ逃れられないものだという問題がたちあられる。⁸¹

1-2 で引用したトゥルコフの場合、そこには単に情報が記されているだけではなく、著述者の価値判断が付属する。つまり、「狂信的愛国主義」という言葉を用い、それを陥るべきではないものと捉えていること、しかし同時に「ドイツ文化」について「頑なに固執」というやや否定的な表現を用い、それが好ましいかどうかの疑問を含有させていること、さらに「ドイツの俗物根性には極度の嫌悪感を抱いていた」という留保を与え、それでも「ドイツ」に反発を覚えるかもしれない読者にとっての安心材料を付随させていること等

⁸⁰ この類似性は同時代の他の著者と比較すると際立って明確である。たとえば В.Я. Бリューซอฟも『芸術について』(1899年)のなかで「ナショナリスト」を用いているが、ここでブリューソフはロマン主義の流れを追う文脈において、「ナロードニキ (ナショナリスト)」と、ナロードニキの説明としてこの語を用いており、ソロヴィヨフやブロークにおける「ナショナリスト」の用法とはかなり異なっている。Брюсов В.Я. О искусстве // Собрание сочинений в 7 томах. Т. 6. М., 1975. С. 51.

⁸¹ Raymond Geuss, *The idea of a critical theory: Habermas and the Frankfurt School* (New York: Cambridge University Press, 1981), pp. 4-26.

が読みとれる。だがむしろブローク自身はドイツ文化に「頑なに固執」などという表現は用いておらず、ここには著述者による「蔑視的」評価や「疑問」といった要素が介在する。

ノヴィコフの場合を見てみよう。著述者は、なぜ『自伝』がいかに書かれたかという経緯を等閑視し、ドイツ系の「家系」より母方のロシアの「家系」を「精神の系譜」とみなしたのであろうか。これを考えるには、第1章で見てきた論争のうち、学術的に根拠のある主張とはとれない文章も含めて確認していく必要がある。

1-1 で言及した、ネボリシンが2011年に発表した記事は、まず自らが公表したブロークの手稿が排外主義的であるとの批判を受けて、ブロークがいかに「ロシア」を「愛して」いたかを述べたうえで、そもそも「排外主義はロシア人には固有の特性ではない」とし、それを再びブロークの「ロシア性」の根拠とする論調である。⁸² だがこのような発想は、塩川伸明がソ連崩壊以降のロシア思潮において顕著な傾向のひとつとして挙げている、『民族』というものが『古来の本質』『古き良きもの』を持っていたはずであり、その復興・維持こそが大事だと考えている点で、顕著に本質主義的・原初主義的な考え⁸³ であるといえよう。それに重ね、排外主義や残虐性といった暴力的傾向が「自らの民族には固有の特性ではない」という（あたかもそれが他のなんらかの民族には固有の特性であるかのような）前提にもとづいて自らの民族とほかの民族との区別を主張する姿勢は民族主義的な色彩を帯びており、前節で見てきたソロヴィヨフおよびブロークの思想とは相容れないものであろう。ネボリシンはこの主張に続き中盤から、ノヴィコフのブローク伝に対する批判を展開し、ノヴィコフがモスクワ大学の後輩にあたることを書いたうえで、「彼はヴィソツキーを理解できたとしても⁸⁴ [...] ブロークを理解することはできないだろう」⁸⁵ と述べる。この批判には根拠が欠如しているが、しかしこのような文章が公に活字化されること自体は、ソヴィエト時代においても、現代においても頻繁に起きていることである。ブロークの伝記にまつわる、さまざまな固定観念の介入や解釈の歪みは、こういった言説の総体に潜む前述のようなバイアスが引き起こしているのではないだろうか。

このような問題は、より大きな範囲でも起こりうる。それが書かれるおのおのの時代になが評価されているかということが、著述自体を大きく規定し、それにそぐわない事実がまとまって見落とされる可能性も出てくるのである。第2章で見てきたイゴシエワの『A.A.ブロークの初期抒情詩（1898-1904）——宗教的シンボリズムの詩学』の場合、同書

⁸² *Небольсин*. Ксенофобия не имеет национальности. С. 7.

⁸³ 塩川伸明「解説」テリー・マーチン（半谷史郎監修／荒井幸康、渋谷謙次郎、地田徹朗、吉村貴之訳）『アフターマティヴ・アクションの帝国：ソ連の民族とナショナリズム、1923年～1939年』明石書店、2011年、558頁

⁸⁴ ノヴィコフはヴィソツキー伝も執筆している。*Новиков В.И. Высоцкий*. М., 2002.

⁸⁵ *Небольсин*. Ксенофобия не имеет национальности. С. 7.

の構想そのものに、ソヴィエト崩壊後における、宗教を否定した者が厳しく批判される傾向のなかで、「宗教性」を強調することによってブロークの復権をはかる意図がみてとれる。また上述のように、「ロシア詩の伝統」の正統派としてブロークを位置づけることを、肯定的な評価と認識している様子がうかがえる。こういった読みかえや解釈のし直しは、現代のロシアにおいて多くの作家に適用されてきた。もちろん、ブロークの作品に「宗教性」を見いだすこと自体が間違いだというわけではないし、それまでの研究で正面から扱えなかった要素を検証する試みからは、多くの有益な指摘が生まれている。

だが、第2章で見てきたように、『自伝』においてヴェルレーヌの影響が否定されていたからといって、それをそのまま事実として受け取れるわけではなく、母親からの影響をもっぱら「宗教性」のみとみなすことには無理がある。しかしその検証の必要性が、このような一定の方向性を有した解釈を前提に研究を行った場合に、とりわけ頻繁に見逃されてしまっているのである。

ブロークについてまわる「偉大なるロシアの詩人」という言葉、あるいは長年にわたりブローク研究の権威とされてきたB.H. オルロフの言うような「歴史はその真実の価値を証明した […]。今、我々は確信し、自信をもって繰り返すのだ——アレクサンドル・ブロークは、ロシアの偉大なる国民詩人 (великий национальный поэт России) であると」⁸⁶といった、そう言い表した者にとっては肯定的なはずの表現には、ブロークがひとつの国家にとって偉大である、そうあるべきだというような前提的な価値観が含まれている。

これは、その国家の教育において生徒や学生に対し、「ブロークにおける祖国のテーマはどう発展していったか」といった問いが課される現状とあいまって、レオンチエフが「我々の精神と生活様式を統一する真のナショナリズム」と言い表した概念——ブロークが抵抗を抱いていたはずの概念に、いみじくも親和的な様相をなしており、このことが、ときに、ソロヴィヨフ的というなら、「真実を曇らせて」いるのではないだろうか。

おわりに

本論のように、これまでの伝記研究におけるさまざまな問題点を取り沙汰することは、一見すると、ブロークの伝記なり作品テキストなりの研究として直接的なアプローチではなく、迂遠しているようにみえるかもしれない。しかし、ブロークの伝記に関連する先行研究を読み進めるうち、現在なお生じ続けている問題点を整理することなしには、ブロークの作品をきちんとテキストにそって論じることは困難であると判断した。そして、今回

⁸⁶ Орлов В.Н. Предисловие // Александр Блок в воспоминаниях современников в 2 томах. Т. 1. М., 1980. С. 35.

のように『自伝』を中心とした研究を見ていった場合において、とりわけ目につかざるをえなかったのが、「ロシア」とそれ以外の「国」に関連した要素を検証する際、および記述する際に生じる、非実証的な価値判断であった。だが、これを分析する過程において、これまでの研究において抜け落ちていた、あるいは等閑視されてきた要素が浮かびあがるとすれば、こうしたアプローチも、迂遠しているようでありながら、必要不可欠な作業工程であるといえるだろう。

本論では、それらの作業工程のうち、ブロークの伝記を考えるうえで、わけても重要性の高い、出自と幼少期の文学の影響問題に焦点を絞った。そして、ブロークの『自伝』をめぐる従来の研究を再検討し、『自伝』の成立過程を考慮したうえで分析を加えた。この検証と分析の過程において明らかになったのは、要約すると主に次の3点である。

①ブロークが1915年の『自伝』において父方の記述を後回しにしている理由は、その元となった1911年版において、フィドレルの質問に回答するためであった。これは各家庭において文学がどの程度重視されていたかを述べたものであり、国籍や民族の重要性の問題ではない。

②少年期のブロークがヴェルレーヌから受けた影響は、1915年の『自伝』においては否定されているが、『自伝』の成立過程、記述方法、およびその他の要素を併せて検証すると、影響関係が存在したと判断できる。

③ブロークが『薔薇と十字架』上演用のメモのなかで、「彼 [ベルトラン] はナショナリストではない」と書いているのは、ソロヴィヨフの直接的な影響である可能性がある。少なくともブロークは、ナショナリズムの問題に関して、ソロヴィヨフに近い立場をとっている。

このうち③は、『自伝』の直接的な分析ではないが、ナショナリズムの問題は、本論で述べてきたようにブローク研究の全般にかかわる問題であり、第1章および第2章の問題点をブロークの思想に沿った視点から洗いなおすためにも不可欠なものであった。ソロヴィヨフがブロークに与えた影響は、かねてから膨大であると認識こそされながら、いまだに検証の余地のある個別のテーマが多く存在する。その影響がそれぞれの時期において具体的にどのような面で及んでいたかは、今後の研究でさらに注意を向けるべき重要なものとなるだろう。本論で述べたような分析・読解の在り方を前提とし、よりブロークの作品自体の考察に軸足を置きながら分析を行なっていくことが、今後の課題となる。

Проблемы биографических исследований Александра Блока

НАГУРА Юри

В ходе биографических исследований А.А. Блока биографы уделяли особое внимание «Автобиографии» Блока 1915 г. Но эта статья впервые была напечатана в 1911 г. Различия между двумя текстами не так велики, однако, при изучении отдельных проблем они становятся довольно значительными.

1. В книге о Блоке (ЖЗЛ, 2010), В.И. Новиков пишет: «Свою духовную генеалогию Блок отсчитывал по материнской линии. «Автобиография» 1915 г. начинается с подробного рассказа о бекетовском роде, [...] а о немецкой блоковской линии речь идет уже в третью очередь». То, что Блок пишет об отце после материнской семьи, правда. Но следует помнить, что эта статья изначально написана как ответ на вопросы Ф.Ф. Фидлера о том, есть ли «наследственность литературного дара», и о «начитанности того или другого родителя». В статье 1911 года Блок ответил, что семья матери была причастна литературе и науке, а «в семье отца, насколько я знаю, литература играла второстепенную роль». В статье 1915 г. он выбросил эту фразу об отцовской семье, но общий ход речи сохранился. Поэтому такую очередность нужно рассматривать не как оценку, которую Блок дал русской «духовной генеалогии», а как конкретный ответ о литературности и начитанности обеих семей.

2. В «Автобиографии» 1915 г. Блок пишет: «Милой же старинной eloquence обязан я до гроба тем, что литература началась для меня не с Верлена и не с декадентства вообще», и «первым вдохновителем моим был Жуковский». Цитируя эту фразу, Т.В. Игошева заключает, что раннего Блока можно считать прямым наследником русской классики. Однако эта фраза о Верлене вписана в 1915 г., а к этому времени Блок окончательно расстался с символизмом. В письме Сологубу 1907 г. он еще признавал сильное влияние, которое Верлен оказал на него в детстве. Есть также важные материалы, сохранившиеся в ИРЛИ: В.К. Чехомов пишет, что Блок в 14 лет для мамы переписывал по-французски Ж. Ришпена, С. Прюдома, П. Верлена.

3. В обеих ситуациях существует особый ракурс. В биографических исследованиях

Блока часто упускается из виду что-нибудь «нерусское». Блока часто считают, как писал В.Н. Орлов, «великим национальным поэтом России». На первый взгляд, это высокая престижная оценка, но хотел ли Блок получить ее? В записке для постановки пьесы «Роза и крест» Блок пишет: «Бертран любит свою родину, притом в том образе, в каком только и можно любить всякую родину, когда ее действительно любишь. То есть, говоря по-нашему, он не националист». Что он здесь имел в виду? Ключи к ответу на этот вопрос есть в полемике К.Н. Леонтьева и В.С. Соловьева. В структуре записки Блок во многом сходится с Соловьевым, который предупреждает об опасности и слепоте национализма. И как писал Эрнест Геллнер, с точки зрения проблемы национализма мы не так уж продвинулись вперед в течение всего XX века. Но, наверное, чтобы понять Блока, нужно быть более Соловьевым, чем Леонтьевым.